

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 藤原久徳

初期の革新的な成長企業への投資を行うベンチャーキャピタルは、その投資対象である新興企業に経営上の助言を適切に行うために、また投資先企業の経営状況を正確に把握するために、地理的に近い投資先を専ら選択するとされてきた。しかしながら最近、海外投資を積極的に行うベンチャーキャピタルが欧米諸国を中心に増えてきており、従来の集積地域から遠く離れた地域に拠点を立地させる企業も少なくない。本研究の目的は、こうしたベンチャーキャピタルの地理的集積と海外立地という現象を取り上げ、国際的な事業展開の実態を把握し、それに関わる決定要因を検討するとともに、ベンチャーキャピタルのグローバル化が、産業集積の発展や集積間ネットワークの形成にどのように関わっているかを明らかにすることにある。

ベンチャーキャピタル自体が少ない日本に比べ、欧米では経営学を中心に、ベンチャーキャピタル研究が非常に活発になされている。しかしながら、立地に関わる問題については部分的に扱われることがほとんどで、ベンチャーキャピタルのグローバル化と集積を本格的に扱った本研究は、先駆的な研究成果として評価することができる。

本論文は、6つの章から成る。第1章では研究の背景と目的が述べられ、第2章ではベンチャーキャピタルの定義や組織などの概要説明に続いて、企業の国際展開や産業集積についての国際経営学および経済地理学の先行研究が整理され、ベンチャーキャピタルの立地を論じる意義や方法が提示されている。

第3章と第4章では、ダウ・ジョーンズ社が発刊する世界のベンチャーキャピタルに関するディレクトリーをもとに関連するデータベースが構築され、ベンチャーキャピタルの立地がさまざまな角度から分析されている。第3章では、生命科学産業に投資する世界33ヶ国842社のベンチャーキャピタルが分析対象とされ、国際展開活動に影響を与えている要因についての計量的な分析がなされている。その結果、ベンチャーキャピタルの本社・外国支店間の投資担当者間のコミュニケーションには距離の近接性が重要であるが、国民文化の差には影響されないことが明らかになった。また、投資対象の産業を特定すべきか否か、産業の成熟度との関係を調べたところ、国際展開する企業は、幅広い産業に投資し、初期ステージ投資にも関心があるという傾向がみられた。

第4章では、生命科学産業に投資するベンチャーキャピタルのうち840社1,530の本・支店所在地が特定され、GIS（地理情報システム）を用いた地理的集積の空間分析と本支店関係をもとにした集積間ネットワークの分析がなされている。その結果、サンフランシスコ

湾岸地域、ボストン、ニューヨーク、ロンドン、テルアビブ、上海などの主要な集積地域が摘出されるとともに、サンフランシスコ湾岸地域と台北、ボストンとミュンヘンなど、関係性の強い集積間ネットワークの存在が確認され、そうしたネットワーク形成に関わる要因についての考察がなされている。

こうした統計資料を用いたグローバルスケールでの3章と4章の分析を受けて、第5章では、文献資料に基づくイベント分析と関係者へのインタビューにより、ドイツのミュンヘン地域におけるバイオテクノロジー産業集積とベンチャーキャピタルとの関係に関する事例研究が行われている。ミュンヘン地域は、大陸ヨーロッパ最大のバイオ産業集積地として知られているが、ドイツ連邦政府によるクラスター政策を評価する従来の研究に対して、ボストンなどに拠点をもつ国際的ベンチャーキャピタルの重要性を指摘した点が注目される。とりわけ、リスク・テイキングに対する文化的・制度的障壁やドイツ特有の企業風土によって停滞していたベンチャーキャピタル産業が、1990年代末以降、「アングロサクソン流経営モデル」の浸透、新興企業向け公開株式市場の開設などにより急成長を遂げ、バイオテクノロジー新興企業の増加につながっていくとの指摘は重要である。

最後の第6章では、第3章から第5章の実証研究から得られた知見が総括されるとともに、日本におけるベンチャーキャピタルのあり方にもふれながら将来展望が記されている。

産業立地の研究において、多国籍企業の立地と産業集積はともに重要な分野とされ、それぞれ別々に多くの研究が蓄積されてきた。本研究は、グローバル立地による集積間ネットワークの形成など、両者を関係づける新たな知見を提示した点に大きな意義がある。

以上のように本論文は、新分野として注目されるベンチャーキャピタルのグローバル立地と集積を解明したもので、現代の経済地理を理解する上で重要な貢献をなす研究成果として、高く評価することができる。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。